

果樹情報 第5号 (R7. 5. 21～R7. 6. 10)

県中農林事務所須賀川農業普及所・JA 夢みなみ(すかがわ岩瀬地区、あぶくま石川地区)

1 各樹種における栽培上の留意点**(1)共通****ア かん水**

5月から夏期にかけて果樹園からの1日当たりの蒸発散量は、晴天日で6～7mm、曇天日で2～3mm、平均で4mm程度であるので、1回のかん水は25～30mm程度(10a当たり25～30t)を目安とし、5～7日間隔で実施しましょう。

保水性が劣る砂質土壌などでは、1回のかん水量は少なくして、かん水間隔を短くしましょう。

イ 草刈り

樹と草との水分競合を防ぐため、草生園では草刈りを行いましょう(地表面からの蒸発散量は、草生園において刈り草をマルチした場合、草刈りしない場合の約半分とされるため)。

ウ マルチ

刈り草や稲わらのマルチを行い、土壌水分の保持に努めましょう。

(2)なし**ア 仕上げ摘果**

予備摘果が終了次第、着果量等を確認し、肥大不良果の除去を中心に仕上げ摘果を行ってください。この際、樹勢の低下や果実肥大の鈍化が観察される場合は新梢停止期前(満開後60～70日、須賀川市の「幸水」で6月21日～7月1日頃)に着果数の10～15%程度を目安に摘果し、着果数を調整します。できるだけ果形、肥大の良い果実を残し適正着果量に調整しましょう。

着果量が少ない園地や品種では、小玉果や変形果であっても着果させ、着果量の確保を優先しましょう。

イ 新梢管理

新梢管理として側枝基部(20～40cmの範囲)の背面に発生した新梢のせん除を行いましょう。ただし、主枝・亜主枝上から直接発生する新梢の数が少なく、側枝更新のための候補枝の確保が困難な部位では側枝基部の側面から発生した新梢を1本残し、冬季せん定時に利用します。なお、新梢のせん除は、満開45～60日後(満開日を4月22日とした場合6月6日～21日)までに行うと花芽分化を促進しますが、満開後60日以降では樹勢低下や果実糖度の低下に結びつきやすいので注意してください。また、満開後65日(6月26日)頃を目安に、予備枝及び不定芽新梢の誘引を行いましょう。

予備枝は先端新梢の生育を促すため、6月上旬までに伸長の良好な新梢を1本に整理してください。

(3)りんご**ア 仕上げ摘果**

仕上げ摘果は満開60日後(須賀川市の「ふじ」で6月27日頃)までを目安に実施してください。果形や肥大状況等をよく観察しながら実施し、形質の良い果実を残しましょう。仕上げ摘果の程度は、「つがる」では3頂芽に1果(1果当たりの必要葉枚数45枚)、「さんさ」、「シナノスイート」、「陽光」、「王林」、「ふじ」は4頂芽に1果(必要葉枚数60枚)を目安とし、樹全体でその1～2割増しとしてください。果形や肥大状況等をよく観察しながら丁寧に実施してください。

仕上げ摘果の遅れは花芽分化率低下の原因となるのでご注意ください。

結実の少ない園地は着果数の確保を優先し、著しい不良果そうを対象に最小限度の摘果を行いましょう。

イ 新梢管理

主枝や骨格枝の背面、切り口等の不定芽から発生している新梢をかき取りましょう。

ウ カルシウム剤の葉面散布

ビターピットの発生は、樹勢が強い園地や着果量が少ない園地で果実が大玉となりやすい場合や、土壌の過乾燥や過湿により土壌からのカルシウムの吸収が阻害される場合に助長されます。これらが想定される園地では、発生防止のためにカルシウム剤の葉面散布を実施しましょう。

(4)もも

ア 仕上げ摘果

果実肥大に差がつく満開後40日頃（須賀川市の「あかつき」で5月27日頃）を目安に仕上げ摘果を開始しましょう。摘果の程度は最終着果量の1～2割増とし、樹勢や双胚果、核障害の発生状況を見ながら加減しましょう。硬核期に近づいたら極端な着果管理は控え、硬核期終了後の修正摘果で適正着果量にして下さい。袋かけを必要とする品種においては、仕上げ摘果終了後速やかに袋かけを実施しましょう。

本年の「あかつき」の核障害発生率は平年より少ない状況です。発生状況は園地や品種によっても異なるため、状況を確認した上で作業に当たってください。

着果量が少ない園地や品種では、小玉果や縫合線が深い果実、軽度の変形果であっても着果させ、着果量の確保を優先してください。

※県農業総合センター果樹研究所によると、本年の硬核期は6月4日（平年より5日早い）に開始すると予測しています。なお、須賀川市の「あかつき」の満開日は、果樹研究所より2日遅い4月17日に確認しています。

イ 新梢管理

樹冠内部や主枝、亜主枝基部、側枝基部の徒長しやすい新梢は早めに摘心や夏季せん定を行いましょう。なお、樹勢の弱い樹は葉面積の確保を優先し、夏季せん定は最小限としましょう。

表1 本年の栽培管理の目安

	4月	5月	6月	7月	8月
なし「幸水」 (満開日:4/22)	←――→ 予備摘果・芽かき 満開後30日まで(5/22まで) 仕上げ摘果 満開後30～50日頃(5/22～6/11まで) ←――→ 夏季せん定・摘心 満開後45日まで(6/6まで) ←――→ 新梢誘引 満開後65～75日頃(6/26～7/6)				
りんご「ふじ」 (満開日:4/28)	――→ 予備摘果 実止まり確認後～満開後30日まで(5/28まで) 仕上げ摘果 満開後60日まで(6/27まで) ←――→ 夏季せん定 6月始め～6月下旬				
もも「あかつき」 (満開日:4/17)	←――→ 予備摘果 満開後14日～満開後30日まで (5/1～5/17) 仕上げ摘果 満開後40日～満開後50日まで (5/27～6/6)				

表2 なし「幸水」の摘果方法

作業名	時期	内容
仕上げ摘果	満開後50日まで (6月11日まで)	・果実をよく観察し小玉果・サビ果・変形果を中心に摘果し、果梗が長く果形の良い果実を残します。最終着果量の10～20%増しにしましょう。 ・長果枝で2.5果そうに1果残します。 ・短果枝で3果そうに1果残します。

表3 りんご「ふじ」の樹勢別の摘果方法

作業名	樹勢	着果量	時期	注意事項
仕上げ摘果	適当	4果そうに1果	満開後 60日以内 (6月27日頃)	・樹勢の弱い場合は早めに、強い樹では最後に行います。 ・上枝や立ち枝は多めに、下枝や下垂枝は少なめに着果させ果実の肥大を調節しましょう。
	強い	3果そうに1果		
	弱い	5果そうに1果		
修正摘果	適当	4～5果そうに1果	6月下旬 ～ 8月下旬	・果形不良、肥大不良、青果、枝ずれ、虫害果などを適宜摘果します。 ・夏季せん定程度や葉の状態、樹勢に応じて、着果過多にならないよう最終着果量を決定しましょう。
	強い	3～4果そうに1果		
	弱い	5～6果そうに1果		

表4 ももの摘果程度の目安

結果枝	長さ	仕上げ摘果	最終着果位置
短果枝	5～15cm	3～4本に1果	枝ずれしない先端部 
中果枝	15～30 cm	1～2果	中間部中心に葉芽のある位置 
長果枝	30cm 以上	3～4果	中間部中心に葉芽のある位置 

2 病害虫防除上の留意点

(1)ナシ黒星病

果樹研究所における黒星病の果実での発病は、5月7日に確認されています。

本病は発生初期の密度抑制が重要であり、果そう基部や果実、葉での罹病部位は見つけしだい除去して適切に処分するとともに、薬剤散布の間隔があきすぎないように、降雨前の散布を心がけ、散布むらのないように薬剤防除の徹底を図りましょう。



図1 果そう基部病斑



図2 発病葉



図3 発病果

(2)モモせん孔細菌病

今後の天候によっては、さらに感染が拡大するおそれがあるため、罹病部位のせん除を徹底するとともに、天候に留意しながら10日間隔で薬剤散布を実施してください。

晩生種や黄肉種などでモモせん孔細菌病の発生が多い場合は、仕上げ摘果終了後速やかに袋かけを実施してください。

袋かけは、薬剤散布後、できるだけ降雨前に実施しましょう。



図4 新梢葉の病斑及び果実の病斑



図5 春型枝病斑の周囲での集団的な発病

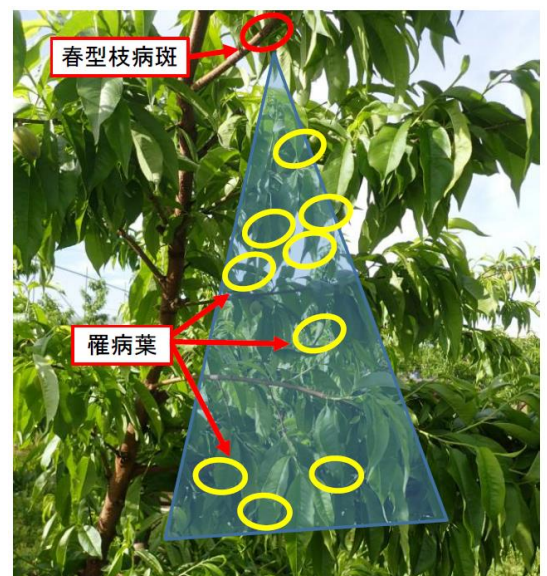


図6 春型枝病斑とその直下の新梢葉での発生

(3)リンゴ褐斑病

落花 30 日後頃は本病の子のう胞子の飛散盛期であり、重要防除時期にあたりますので、薬剤は十分量を散布し、防除を徹底してください。

(4)リンゴ腐らん病

本病の発生がみられる園地では防除を徹底しましょう。特に「ふじ」は摘果が遅れると果柄が脱落しにくくなり、本病に感染しやすくなるので、早期に実施するようにしましょう。

(5)モモハモグリガ

第1世代成虫の誘殺盛期は、今後の気温が2℃高く推移した場合、5月6半旬頃と予測され、第2世代幼虫の防除適期は6月1半旬頃と推定されます（表5）ので、第2世代幼虫の防除適期に合わせてディアナWDG 10,000倍（ももに登録あり）を特別散布しましょう。本種の発生には放任園や無防除のハナモモ園が影響していると考えられるため、こうした発生源が近隣に存在する園地では、今後も発生に注意しましょう。



図7 モモハモグリガによる食害

(6)ナシヒメシンクイ

ナシヒメシンクイ第1世代成虫の誘殺盛期は、今後の気温が2℃高く推移した場合、6月3半旬頃と予測され、第2世代の防除適期は6月5半旬頃と推定されます（表5）。
本種の第1世代幼虫は、主にモモ等の核果類の新梢に寄生（芯折れ症状）し、第2世代以降はナシなどの果実に移行します。例年、ナシでの果実被害が多い地域では、近隣のモモ等における防除も徹底しましょう。

(7)カイガラムシ類

ナシマルカイガラムシ第1世代のふ化開始は、気温が2℃高く推移した場合、5月6半旬頃と予測され、ふ化盛期は6月2半旬頃と推定されます（表5）。リンゴ園においてナシマルカイガラムシの発生が多い場合、第一世代ふ化開始期にトランスフォームフロアブル 2,000倍（もも、なし、りんごに登録あり）を散布し、第一世代ふ化盛り期の直前にアプロードフロアブルの1,000倍（もも、なし、りんごに登録あり）を散布しましょう。

(8)カメムシ類

5月中旬頃から越冬世代成虫による加害がももで確認されています。特に、山沿いの果樹園ではカメムシ類の飛来状況をよく観察し、多数の飛来が見られる場合は速やかに防除を行いましょう。

表5 果樹研究所における主要害虫に対する防除時期の推定(令和7年5月15日現在)

今後の気温予測	モモハモグリガ		ナシヒメシンクイ		ナシマルカイガラムシ	
	第1世代 誘殺盛期	第2世代 防除適期	第1世代 誘殺盛期	第2世代 防除適期	第1世代 ふ化開始	第1世代 ふ化盛期
2℃高い	5月30日	6月4日	6月13日	6月21日	5月29日	6月7日
平年並	6月3日	6月9日	6月20日	6月29日	6月3日	6月13日
2℃低い	6月6日	6月13日	6月27日	7月7日	6月7日	6月19日

起算日:モモハモグリガ越冬世代誘殺盛期 4月 22 日
ナシヒメシンクイ越冬世代誘殺盛期4月 21 日
ナシマルカイガラムシ 3月 1 日(演算方法は三角法)

(9)ニセナシサビダニ

例年、園地内で葉のモザイク症状や落葉症状が見られるナシ園地では、6月中旬に特別散布としてカネマイトフロアブルの1,000倍（なしに登録あり）を散布しましょう。